

# 女子大学生のキャリア意識に関する縦断的研究

～1年次から卒業までの成長に着目して～

## A Longitudinal Study of Career Attitudes of Female College Students

鶴田 美保子

Mihoko TSURUTA

### 問題と目的

#### 1. 問題の背景

金城学院大学では、大学時代をキャリアの基礎をつくる重要な時期と捉え、2004年より「キャリアデザインの形成」、「目標の明確化と能力開発」、「自律的な進路選択行動」の3つを学生に達成してもらうことを目的に、全学的なキャリア教育体制を整備してきた。正課授業科目としてのキャリア開発教育科目群（8科目）では、女性のライフキャリアを理解し自律的なキャリア開発をするための知識とスキルを修得できるように、主要なキャリア理論などに基づく授業にとどまらず、卒業生や企業、自治体とも連携を図る独自の取り組みをしている。これらは先進的キャリア教育の実践として、2006年に文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）に選定された。

この約20年の間に、働く環境は、ダイバーシティ推進、技術革新、産業構造の変容など、大きく変わってきた。女性に関わることとしては、2015年に女性活躍推進法が成立し、2021年には育児・介護休業法が改正されるなど、法制度が整備されてきている。加えて、女性が職業を持つことに対する意識も社会全

体として変化してきた。1992年に実施された内閣府による世論調査では、「子供が大きくなったら再び職業をもつ方がよい」と答えた者の割合が、女性（45.4%）、男性（39.2%）ともに最も高かった。その後、「子供が大きくなったら再び職業をもつ方がよい」の割合は男女ともに減少する一方、「子供ができて、ずっと職業を続ける方がよい」の割合が増加した。2016年の調査では、「子供ができて、ずっと職業を続ける方がよい」と回答する割合が、男女ともに5割を上回った（内閣府男女共同参画局、2017）。これと時期を同じくして、共働き世帯数は増加する一方、専業主婦世帯数は減少傾向にある。1985年の時点では、「男性雇用者と無業の妻から成る世帯（妻64歳以下）」は936万世帯、「雇用者の共働き世帯（妻64歳以下）」は718万世帯であったが、2021年の時点では、「雇用者の共働き世帯（妻64歳以下）」は1,177万世帯、「男性雇用者と無業の妻から成る世帯（妻64歳以下）」は458万世帯と、大きく逆転している（内閣府男女共同参画局、2022）。今の大学生の母親の多くは、女性が職業を持つことに対する意識の変化と、共働き世帯数が専業主婦世帯数を逆転する過渡期であった2000年頃に出産と育児をしてきた世代である。先行研究

で、母親が育児をしながら就業を継続している場合は、学生も望む生き方として就業継続を選択する割合が高くなっている（大風, 2019）とあるように、母親のライフコース選択が、子供である学生のキャリア意識に何らかの影響を与えている可能性がある。

また、技術革新により人々の生活様式や価値観を一変させることがあるなど、産業の将来を予測することが難しいVUCAの時代が到来したと言われている。これは働く環境に限ったことではなく、学生たちの身近な出来事としては、新型コロナウイルスの影響で急に遠隔授業への対応を求められたことなどが挙げられる。避けることができない状況に対しても、心の健康を保ち、自己効力感を持って対処することが、ますます必要になる。そのため、本学のキャリア開発教育科目では、キャリア理論に加えて、ポジティブ心理学や社会心理学の知見も援用して、授業の内容を時代に合ったものになるよう見直しを行っているが、さらに、現在の学生のキャリア意識を明らかにすることで、学生だけでなく社会の新たなニーズに柔軟に対応できる教育プログラムを構築する必要があると考える。

キャリアを探索する時期にあたる大学時代に、多くの学生たちは学業のみならず、サークル活動、ボランティア活動、アルバイト、就職活動などにも力を入れる。キャンパスを始めとするこれらの場で、家族以外の社会と接点を持つことによって成長し、また、自身の長期的なキャリアを考えることにもつな

がっている。1年次と卒業時に縦断的調査をすることによって、キャリア意識の変化と成長を促すものを明らかにすることは意義があると考えられる。なぜなら学生たちが大学時代をやり多いものにするによって、自分自身の人生を主体的にデザインし、その実現に向けて積極的に行動できるように、本研究の結果を活用し支援することが、キャリア教育と大学全体に求められるからである。

## 2. 本研究の目的

このように日本社会の働き方が変革期にある中、学生のキャリア意識を把握し支援していくことが大学に求められる。本研究では、学生のキャリア意識（仕事志向・家庭志向）について検討する。および、それを規定する要因であろうと考えられる家族の関係性、母親のライフコース、心の健康、自己効力感、平等主義的性役割観、ソーシャルスキル、活動性、持久性について分析すること、そして、1年次と卒業時での変化を比較することを目的とする。加えて、大学生生活を通じて自分自身の成長を促したものを、学生がどのように捉えているかについても明らかにする。

## 3. 研究モデル

本研究では、家族に関わる要因と人格特性（中核的人格特性・行動的人格特性）が、キャリア意識（仕事志向・家庭志向）にどのように影響を及ぼすのかを、包括的に確認するモデルを設定した（Figure 1）。

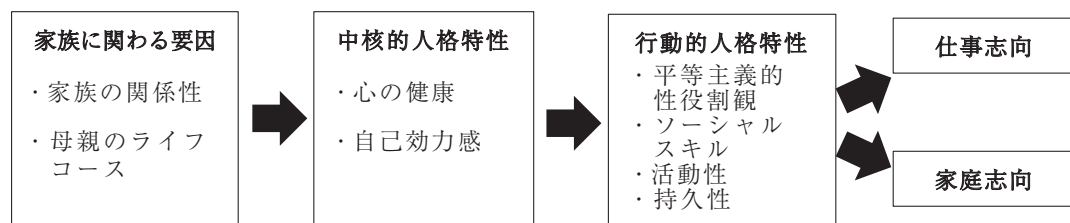


Figure 1 本研究で仮定された始発モデル

## 方 法

### 1. 調査対象者および調査手続き

金城学院大学2018年度入学生を対象にした。1年次のキャリア開発科目の授業時間中に質問紙を配布し、その場で回答を求めた。また、卒業時にGoogleフォームを利用して質問紙調査を実施した。どちらの調査も匿名で実施され、統計的に処理がなされることを文章で説明し、さらに調査協力に同意した者のみ回答をするよう依頼した。

1年次と卒業時の両方で回答したのは140名であった。学部の内訳は、文学部39名、生活環境学部27名、国際情報学部20名、人間科学部54名である。

調査期間は、2018年10月～11月（1年次）と2022年3月（卒業時）である。

### 2. 調査項目

#### 母親のライフコース

母親のライフコースを結婚や出産にあたり「仕事をもち続けている」（3点）、「中断再就職」（2点）、「仕事をやめた」（1点）のうちから一つ選んでもらった。

#### 家族の関係性

「私の家族は、お互いに強い結びつきを感じている」「私の家族は、一緒に行動することが多い」「私の家族は、お互いのことをよく理解している」「私の家族は、よくコミュニケーションをとっている」「私の家族は、必要に応じて助け合っている」の5項目を尋ねた。回答は「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（4点）の4点法である。

#### 平等主義的性役割観

平等主義的性役割態度スケール（SESRA）の短縮版（鈴木，1994）の中から「結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである」「女性

の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である」「家事は男女の共同作業である」「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく育てることが非常に大切である」「女性は家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いたほうがよい」の5項目を尋ねた。回答は「全くあてはまらない」（1点）から「非常にあてはまる」（4点）の4点法である。反転項目4項目を含み、回答は得点の高い方が、性役割態度が平等主義的であるように修正された。

#### 心の健康

ハッピーネス尺度（植田・吉森・有倉，1992）の中から「毎日が充実している」「将来に夢を持っている」「生き方に自信を持っている」「少しずつ成長しているような気がしている」「人に誇れるものがある」の5項目を尋ねた。回答は「そう思わない」（1点）から「そう思う」（4点）の4点法である。

#### 自己効力感

Generalized Self-Efficacyの邦訳版である特性的自己効力感尺度（成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田，1995）の中から「自分が立てた計画はうまくできる自信がある」「初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける」「重要な目標を決めて行うときは、ほとんど成功する」「困難に立ち向かうこともいとわない」「何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる」の5項目を尋ねた。回答は「そう思わない」（1点）から「そう思う」（4点）の4点法である。

#### ソーシャルスキル

Kiss-18（菊池，1988）の中から「他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができる」「他人を助けることを、上手にやれる」「周りの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できる」「気まずい

ことがあった相手と、上手に和解できる」「自分の感情や気持ちを、素直に表現できる」「何か失敗したとき、すぐに謝ることができる」の6項目を尋ねた。回答は「いつもそうでない」(1点)から「いつもそうだ」(4点)の4点法である。

### 活動性

新性格検査(柳井・柏木・国生, 1987)の下位尺度「活動性」の項目の中から「人からリーダーとして認められたい」「友達よりもてきぱきと仕事ができる」「何事にも積極的に取り組む」「いつもやる気がある」「思い立ったらすぐに実行する」の5つを尋ねた。回答は「全くあてはまらない」(1点)から「非常によくあてはまる」(4点)の4点法である。

### 持久性

新性格検査(柳井・柏木・国生, 1987)の下位尺度「持久性」の項目の中から「やりかけたことは最善をつくす」「こつこつやるほうだ」「面倒な作業でも投げ出さずにやれる」「やりかけた仕事は一生懸命最後までやる」「将来のためならどんな辛さにも耐えられる」の5つを尋ねた。回答は「全くあてはまらない」(1点)から「非常によくあてはまる」(4点)の4点法である。

### 大学時代の活動

「学業」「資格取得」「語学研修」「ボランティア」「部活動」「趣味」「アルバイト」「インターンシップ」「就職活動」について、その活動を頑張った程度を卒業時に尋ねた。「全く頑張らなかった」(1点)から「とても頑張った」(4点)の4点法で回答を求めた。

### 仕事志向

「働くことに魅力を感じている」「就職先を考える時に、自分自身で大切にしたいものがある」「卒業後は、働いて経済的に自立したい」「将来について、自分なりに夢や理想がある」「なぜ働くのか」目的や意味について

自分なりの考えがまとまっている」「いろいろな人の生き方・働き方に関心がある」「就職した自分をイメージすると、ちょっとわくわくする」「仕事を選ぶ時は、最終的には自分で決断しなければならないと思う」「就職活動を通じて、自分の可能性が広がると思う」「どういう場所(国内・海外・都会・地方等)で、どんな生き方をしたいか考えている」の10項目を尋ねた。回答は「全くあてはまらない」(1点)から「非常によくあてはまる」(4点)の4点法である。

### 家庭志向

「結婚して家庭を持つこと」「子どもを産み、育てること」「家族団らんを楽しむこと」「家族の役に立つこと」「家族とのきずなを大切にすること」の5項目が、将来の自分にとってどの程度重要か尋ねた。回答は「重要ではない」(1点)から「とても重要である」(4点)の4点法である。

### 成長を促したもの

卒業時に、大学4年間を振り返り、自分自身の成長を促したものについて尋ね、自由に記述をしてもらった。

## 結果

### 1. 変数間の関係性

Table 1は1年次、Table 2は卒業時における、各変数の平均値、標準偏差、信頼性係数、変数間の相関係数を示したものである。分析にはピアソンの積率相関分析を使用した。

### 2. キャリア意識を規定する包括的關係性

本研究で設定した研究モデルに従ってAmos25.0による共分散構造分析を実施した。分析は変数に対するパスの加除を行い最良のモデルを探索した。主要な結果は、以下のとおりである。

Table 1 1年次の各変数の平均値、標準偏差、信頼性係数、変数間の相関係数

	平均値	SD	α係数	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 母親のライフコース	1.72	0.69										
2 家族の関係性	2.95	0.67	.886	.038								
3 平等主義的性役割観	3.18	0.44	.605	.037	.026							
4 心の健康	2.64	0.68	.846	-.070	.261**	-.045						
5 自己効力感	2.52	0.50	.716	-.176*	.176*	.029	.455**					
6 ソーシャルスキル	2.65	0.50	.760	-.096	.259**	.032	.349**	.548**				
7 活動性	2.37	0.52	.671	-.013	.275**	.062	.472**	.615**	.556**			
8 持久性	2.79	0.50	.640	-.010	.390**	-.053	.359**	.522**	.456**	.530**		
9 仕事志向	3.00	0.50	.826	-.031	.259**	.208*	.503**	.386**	.322**	.404**	.356**	
10 家庭志向	3.21	0.75	.907	-.037	.407**	-.348**	.348**	.283**	.354**	.352**	.363**	.210*

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

Table 2 卒業時の各変数の平均値、標準偏差、信頼性係数、変数間の相関係数

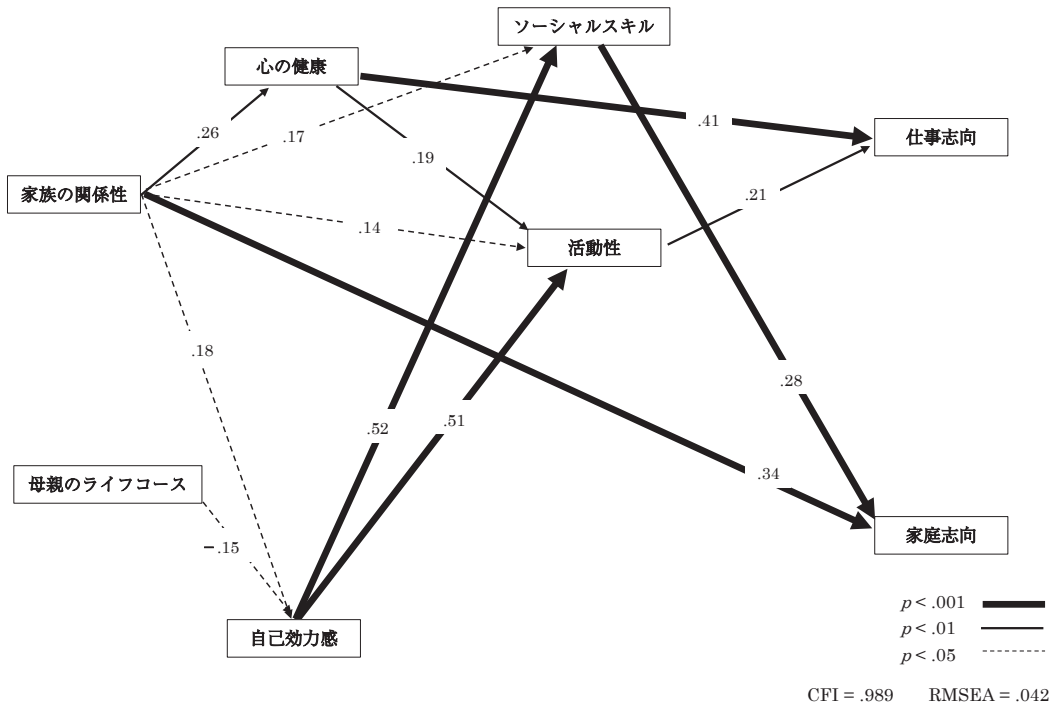
	平均値	SD	α係数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
1 母親のライフコース	1.72	0.69																				
2 家庭環境	2.95	0.67	.886	.038																		
3 平等主義的性役割観	3.48	0.45	.711	.191*	.070																	
4 心の健康	2.86	0.68	.855	-.020	.286**	.115																
5 自己効力感	2.68	0.57	.732	-.090	.253**	.049	.640**															
6 ソーシャルスキル	2.80	0.54	.780	-.008	.153	.071	.475**	.527**														
7 活動性	2.56	0.57	.637	-.018	.190*	-.008	.548**	.629**	.558**													
8 持久性	3.00	0.55	.752	-.164	.310**	.089	.446**	.688**	.418**	.549**												
9 学業	3.32	0.70		-.090	.235**	.179*	.375**	.282**	.240**	.274**	.291**											
10 資格取得	3.01	0.99		.001	.103	.132	.192*	.230**	.105	.207*	.235**	.348**										
11 語学研修	1.48	0.85		-.030	.122	-.019	.180*	.231**	.162	.274**	.172*	.082	.009									
12 ボランティア	1.82	1.02		-.094	.129	.038	.212*	.237**	.217*	.168*	.191*	.233**	.230**	.009								
13 部活動	2.40	1.26		.029	.048	-.094	.164	.056	.122	.187*	.127	.054	-.023	.024	.073							
14 趣味	3.15	0.88		-.001	.201*	.158	.317**	.228**	.195*	.204*	.179*	.340**	.056	.047	.127	.129						
15 アルバイト	3.54	0.71		-.097	.011	.025	.304**	.233**	.111	.200*	.234**	.171*	.025	.087	.063	.014	.318**					
16 インターンシップ	2.09	1.08		-.093	-.045	-.006	.156	.182*	.114	.264**	.279**	.213*	.186*	.252**	-.002	.136	.047	.153				
17 就職活動	3.24	0.86		-.026	.200*	.090	.232**	.305**	.293**	.383**	.338**	.278**	.133	.154	.258**	.071	.285**	.144	.379**			
18 仕事志向	3.20	0.45	.796	-.051	.180*	.176*	.626**	.606**	.470**	.522**	.532**	.283**	.166	.259**	.294**	.107	.149	.246**	.270**	.359**		
19 家庭志向	3.15	0.71	.860	-.060	.338**	-.283**	.280**	.270**	.222**	.315**	.324**	.128	.246**	.128	.114	.176*	.049	.079	.154	.207*	.249**	

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

1年次（Figure 2）では、家族の関係性が心の健康（.26,  $p < .01$ ）に影響し、心の健康から活動性（.19,  $p < .01$ ）を介して仕事志向（.21,  $p < .01$ ）へつながるとともに、心の健康から仕事志向（.41,  $p < .001$ ）へ有意なパスが直接形成された。その一方、家庭志向へは家族の関係性（.34,  $p < .001$ ）が直接影響していた。また、自己効力感は活動性（.51,  $p < .001$ ）を介して仕事志向（.21,  $p < .01$ ）へつながるとともに、ソーシャルスキル（.52,  $p < .001$ ）を介して家庭志向（.28,  $p < .001$ ）へつながることが示された。

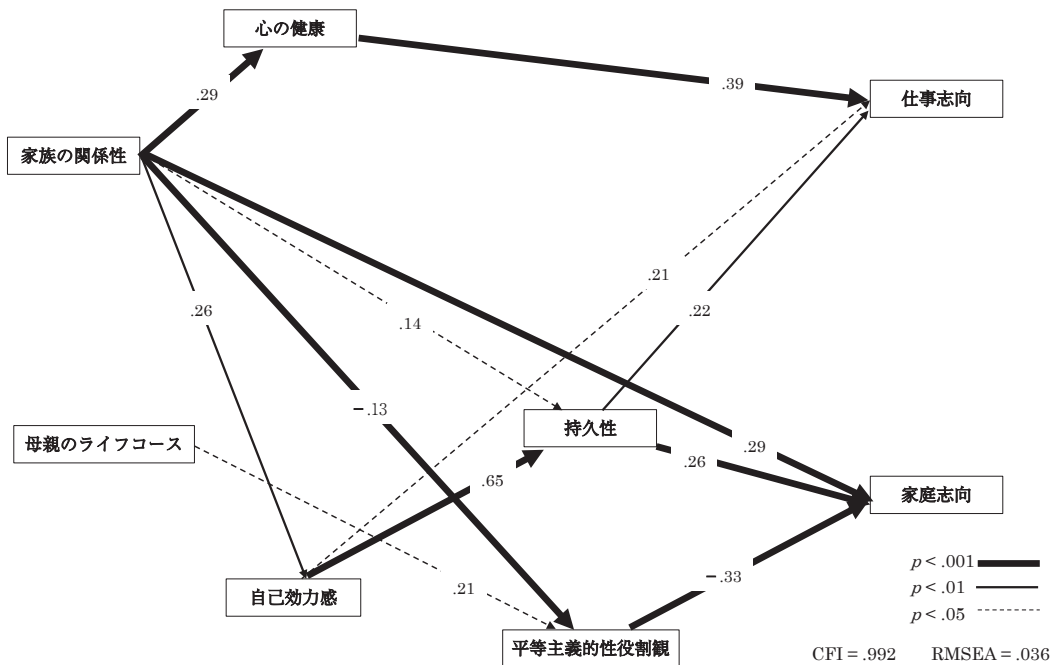
卒業時（Figure 3）では、1年次と同じく、

家族の関係性が心の健康（.29,  $p < .001$ ）を介して仕事志向（.39,  $p < .001$ ）に影響している。家庭志向へ家族の関係性（.29,  $p < .001$ ）が直接影響しているのも1年次と同じである。一方、1年次と異なり、自己効力感は持久性（.65,  $p < .001$ ）を介して仕事志向（.22,  $p < .01$ ）と家庭志向（.26,  $p < .001$ ）に影響を与えていた。また、家庭の関係性が平等主義的性役割観（-.13,  $p < .001$ ）に負の影響を与えていた。そして、性役割態度が平等主義的でない方が家庭志向（-.33,  $p < .001$ ）であることが示されたのも、1年次と異なる点である。



注) 持久性と平等主義的性役割観には、有意なパスが認められなかったため、削除した。

Figure 2 1年次のキャリア意識を規定する要因の包括的關係性



注) ソーシャルスキルと活動性には、有意なパスが認められなかったため、削除した。

Figure 3 卒業時のキャリア意識を規定する要因の包括的關係性

### 3. 1年次と卒業時における各変数の平均値の比較

人格特性とキャリア意識の各変数について1年次と卒業時に差があるかどうかを調べるために、対応のあるt検定を行った (Table 3)。

Table 3 1年次と卒業時の各変数の平均値の比較

	1年次		卒業時		t値
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	
平等主義的性役割観	3.18	(0.44)	3.48	(0.45)	7.86 ***
心の健康	2.64	(0.68)	2.86	(0.68)	3.63 ***
自己効力感	2.52	(0.50)	2.68	(0.57)	3.63 ***
ソーシャルスキル	2.65	(0.50)	2.80	(0.54)	3.35 **
活動性	2.37	(0.52)	2.56	(0.57)	4.59 ***
持久性	2.79	(0.50)	3.00	(0.55)	4.55 ***
仕事志向	3.00	(0.50)	3.20	(0.45)	4.53 ***
家庭志向	3.21	(0.75)	3.15	(0.71)	1.04

\*\*P<.005 \*\*\*P<.001  
自由度はいずれも134

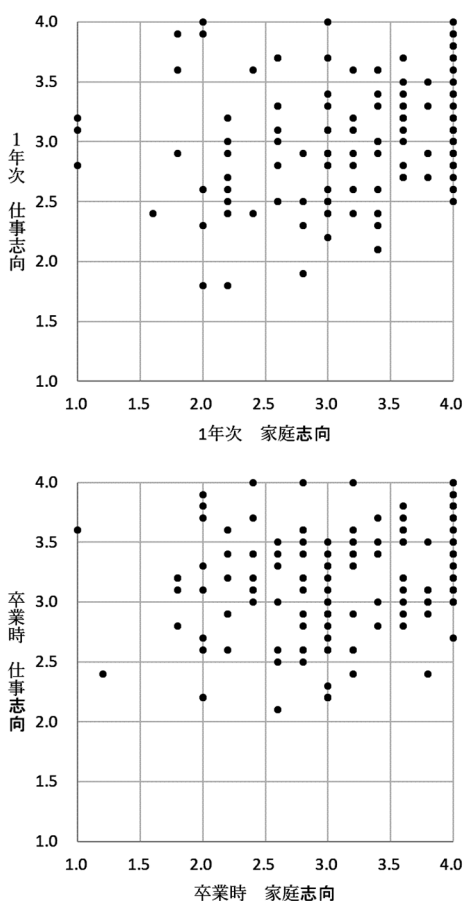


Figure 4. 仕事志向・家庭志向得点散布図

人格特性のすべての変数が、1年次と比較して卒業時の平均値は有意に上昇していた。

キャリア意識においては、1年次より卒業時の仕事志向の平均値は有意に高くなっていた ( $t(134) = 4.53, p < .001$ )。一方、家庭志向の平均値は低下したが、有意差は認められなかった。Figure 4に、1年次と卒業時の仕事志向・家庭志向における全調査対象者の得点の散布図を示す。

### 4. キャリア意識と大学時代頑張った活動

仕事志向、家庭志向、それぞれの上位層と下位層では、大学時代の活動を頑張った度合いに違いがあるのかを明らかにするために、対応のないt検定を実施した (Table 4, 5)。仕事志向においては、上位30.9%にあたる度数3.5以上の43名を上位層とし、下位27.3%にあたる度数2.9以下の38名を下位層とした。仕事志向の中央値は3.2である。また、家庭志向においては、上位28.8%にあたる度数3.8以上の40名を上位層とし、下位25.2%にあたる度数2.6以下の35名を下位層とした。家庭志向の中央値は3.2である。

Table 4 仕事志向上位層・下位層の比較

有意差のある大学時代頑張った活動

	仕事志向上位層		仕事志向下位層		t値
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	
学業	3.53	(0.67)	3.03	(0.79)	3.15 **
語学研修	1.74	(1.07)	1.32	(0.67)	2.19 **
ボランティア	2.12	(1.11)	1.29	(0.57)	4.27 ***
アルバイト	3.74	(0.54)	3.32	(0.84)	2.69 *
インターンシップ	2.44	(0.52)	1.79	(0.57)	2.59 *
就職活動	3.58	(0.73)	2.82	(0.93)	4.15 ***

\*P<.05 \*\*P<.005 \*\*\*P<.001  
自由度はいずれも79

Table 5 家庭志向上位層・下位層の比較

有意差のある大学時代頑張った活動

	家庭志向上位層		家庭志向下位層		t値
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	
資格取得	3.30	(0.85)	2.66	(1.08)	2.87 **
就職活動	3.38	(0.81)	2.94	(0.94)	2.21 *

\*P<.05 \*\*P<.005  
自由度はいずれも73

「学業」「資格取得」「語学研修」「ボランティア」「部活動」「趣味」「アルバイト」「インターンシップ」「就職活動」の平均値の比較をしたところ、有意な差があったのは、仕事志向では「学業」「語学研修」「ボランティア」「アルバイト」「インターンシップ」「就職活動」であった (Table 4)。その一方、家庭志向では「資格取得」「就職活動」のみであった (Table 5)。

### 5. 「成長を促したもの」頻出語の共起ネットワーク

「大学4年間を振り返って、あなたの成長を促したこと」についての自由記述では、139の文と3,326語の総抽出語数が得られたので、共起ネットワーク分析を行った。共起

ネットワーク分析とは、抽出された「語」同士がどのように似通った文脈で使用されているかをネットワーク図で確認する手法である。共起ネットワーク図において、出現回数は図形 (円) の大きさに比例し、共起・関連の強さは図形の位置や近さではなく線で接続されているか否かとその強さで表現されている (樋口, 2004)。語の最小出現数を5とし、描画する共起関係は70までとして作成した (Figure 5)。その結果、成長を促したものに関する記述は、5つのグループに分けられた。Table 6 にグループ内での頻出語数とそれぞれの文例をまとめた。

「大学」「学ぶ」「資格」「実習」などの語句がある1つ目には、「大学における学び」と命名した。2つ目は「就職」「アルバイト」「経

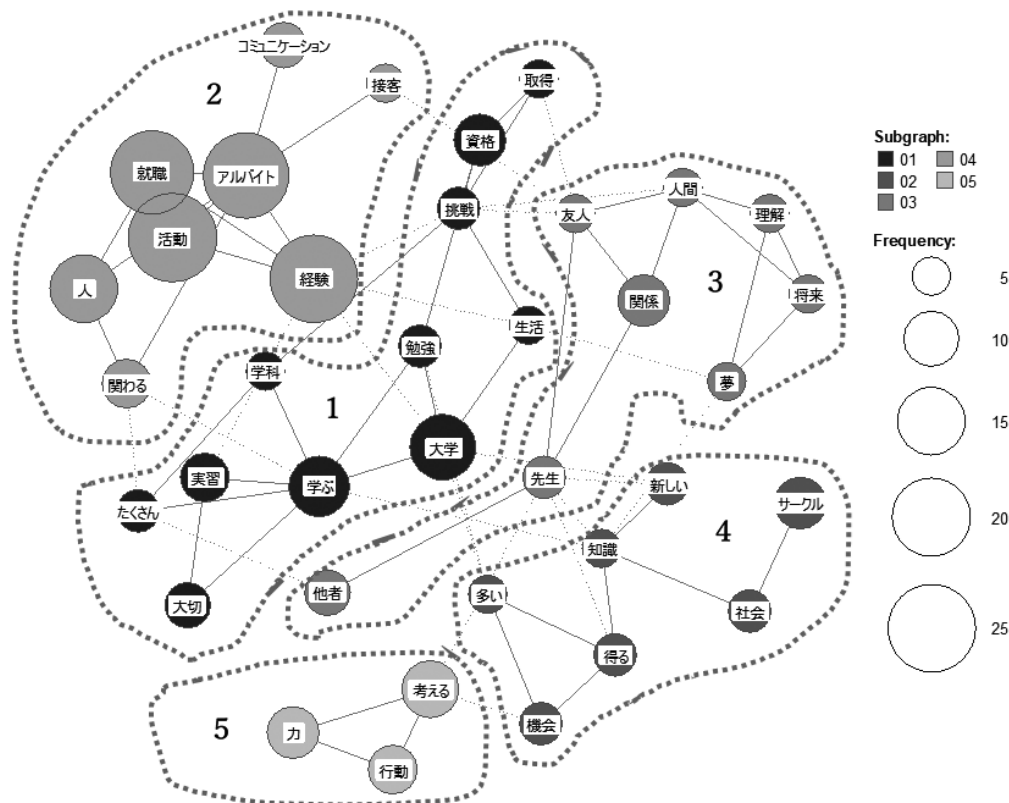


Figure 5 成長を促したことについての自由記述の共起ネットワーク分析



験」などの語句が抽出されたため、「仕事の経験」と名付けた。「関係」「他者」「先生」などの3つ目のグループは「他者との相互理解」と、「サークル」「社会」「機会」などがある4つ目グループは「社会とのつながり」と命名した。「考える」「力」「行動」から成る5つ目のグループについては、記述された文章とその文脈から「困難な出来事」と名付けた。なぜなら病気やコロナ禍でのオンライン授業、就職活動など、辛いことや大変なことに直面したことによって、考え、行動したという記述がみられたからである。

## 考 察

### 1. 女子大学生のキャリア意識

本研究では、大学1年次と卒業時のキャリア意識（仕事志向・家庭志向）、および、それぞれを規定する要因について包括的な因果関係を分析しようとした。

#### 1) 仕事も家庭も志向

まず、1年生の時点で、仕事志向の平均値は3.00、家庭志向の平均値は3.21で、ともに高い傾向にあり、かつ、1年次の仕事志向・家庭志向得点散布図（Figure 4）からも「仕事か、家庭か」の二者択一で考えているのではなく、「仕事も家庭も」志向であることが分かった。さらに、卒業時には、仕事志向の

Table 6 グループ別頻出語と文章例

グループ	頻出語（数）	文章例
1 大学における学び	大学(14) 学ぶ(12) 資格(11) 実習(8) 大切(7) たくさん(6) 挑戦(6) 勉強(6) 学料(5)	高校の時は教料を勉強するだけであったが、大学になってからいろいろな分野を多く学び、その上で自分はどう思うのか、どう考えたのかを自分の言葉でまとめて文章にする機会が多かった。そのため、社会人になってからも自分はどうしていきたいのか、どの方法が最適なのか考える練習になったと思う。 新しく挑戦して頑張ったという経験が欲しいと思って、資格取得に一生懸命取り組んだこと。 資格が取れるように毎日勉強を続けた事が、自分自身の成長につながったと思う。 教育実習で自分の実力や向き不向きに気づき、将来の選択を自分のしっかりとした意思でできるようになった。
2 仕事の経験	活動(26) 経験(25) アルバイト(24) 就職(23) 人(15) 関わる(8) コミュニケーション(7) 接客(5)	就職活動では自分の適性に向き合い、やりたいことは何かを深く考えることができたと思う。 就職活動が自分のことを見つめ直すきっかけになり、成長できたと思います。 アルバイトで社会に触れ、実際にお金を稼いだことで、就職した時の実際の大変さや資格の重要さを具体的に掴み、将来への展望が変化しました。 部活内で会計係を担当したり、アルバイトでは学生バイトリーダーを担当したりなど、自分からできる事に挑戦してみたり、普段の自分ならばやらない事でも、頼まれたからちょっとやってみようかなと挑戦してみたらなど、様々な経験をしてみた、ということが成長を促したと言えると感じました。 アルバイトや学園祭実行委員会などの他者と関わる活動をたくさん経験し、他者の意見やどのように大勢と関わるべきなのか学ぶことが出来たため、自分の成長に繋がりました。
3 他者との相互理解	関係(9) 他者(7) 先生(6) 将来(5) 夢(5) 友人(5) 理解(5) 人間(5)	他の学生や先生、職員の方など、多くの他者と関係することで、自分のことも他者のことも以前より深く考えられるようになった。 将来について理解しあえて語り合える仲間ができたことで、夢への意欲がまった。 周りのみんなと切磋琢磨できる環境であったため、たくさん刺激を受け、自分も見習わなければという気持ちに自然に芽生えた。 友達など周囲の人と、将来のことや就職のこと、自分自身のことを深く話したことで、自分では考えなかった選択肢や新しい視点を知ることができる。また、自分も頑張ろうと思える機会となった。挫けそうなきも周囲に相談したり友達に話を聞いてもらったりしたことが一番の力になった。
4 社会とのつながり	サークル(9) 社会(6) 新しい(6) 機会(6) 得る(6) 多い(5) 知識(5)	サークルでは渉外役員を担当したので、外部の方々とコミュニケーションを通して、いろいろな知識を得ることができた。 趣味関連で出来た社会人とのつながりを通して、実際に社会に出て働くイメージを掴めた。 友人の勤めなど人間関係から色々な機会をもらい挑戦したことで、(海外旅行やコンテストなど) 新しく出会った人たちの優しさ、考え方が私を変え、成長させてくれました。
5 困難な出来事	考える(11) 力(9) 行動(8)	病気になってどんな風に働きたいか、どんな人生にしたいか考えるようになったこと。 コロナ禍のオンライン授業では、直接先生や他の学生と会えないので、大学・先生からのお知らせをしっかりと見て、分からないことなどは先生にSNSやメールなどを使って連絡するなど、自分に必要なことを見極める力や自主的に考え、行動する力が身についたと思います。 友人と参加したインターンシップ、接客アルバイト経験が、高校までの内気な自分の性格を良い方向へ変えたと感じます。自分の頭で考え前向きに行動へ移す力がつきました。 就職活動は、辛いことが何度もあったが目標のために行動し続けられる自分を知ることができました。

平均値が3.20へ上昇していることから、「仕事も家庭も」志向がさらに強まっているといえる。

子育て期などのライフステージによっては仕事から離れることがあっても、働くことへの志向が無くなるわけではない。これまでは、出産を機に仕事から離れ、子育て後に再就職する「中断再就職」をライフコースとして選ぶ女性が多くいたが、働き方改革や育児・介護休業法などの法整備が進む中、子育て期も短時間勤務やテレワークなどを利用しながら仕事を継続し、長期にわたり仕事と、家庭を含む仕事以外の生活のどちらも充実させようとする人が増えていくと考えられる。

ワーク・ライフに関する研究でも、1980年代から2000年頃までは仕事における役割と家庭における役割の間のネガティブな側面の研究がコンフリクトという概念を用いて盛んになされていた。しかし、2000年以降、複数の役割間の調和や相乗効果など、ワークとライフのポジティブな関係性についての研究が増えている(藤本, 2011)。例えば、ワーク・ファミリー・エンリッチメントとは、ひとつの役割における経験が別の役割における経験の質を高めることである(Greenhaus & Powel, 2006)。ひとつの役割における5つのリソース(スキルとパースペクティブ、心理的・身体的資源、社会的資源、柔軟性、物理的資源)が、直接的に別の役割の業績を高めたり、ポジティブな感情を経由して間接的に作用する。将来、学生たちが望むワーク・ライフ・バランスを実現するために、どのようなリソースを獲得することが必要かを伝えていきたい。

## 2) キャリア意識を規定する要因の変化

キャリア意識(仕事志向・家庭志向)を規定する要因の包括的関係性を調べるためにパス解析を行った。ここでは、1年次(Figure 2)

と卒業時(Figure 3)の違いに注目したい。

1年次は、「心の健康」と「自己効力感」から「活動性」を介して「仕事志向」に影響を及ぼしていたが、卒業時には「活動性」に有意なパスは認められなかった。一方、1年次には「持久性」に有意なパスが認められなかったが、卒業時には、「自己効力感」から「持久性」を介して「仕事志向」につながっていた。サークルなどの活動を活発に行っている1年生ほど、将来の仕事に関わるアクションをおこしている(岩井, 2021)ように、大学生活が始まって間もない1年次には、自己効力感が「何事も積極的に取り組む」「思い立ったらすぐに実行する」といった活動性に影響して仕事志向を形成している。しかしながら、4年を経た卒業時には、「やりかけたことは最善をつくす」「投げ出さずにやる」という持久性が仕事志向を規定している。この持久性が、日本経済団体連合会(2022)が発表した「採用の観点から、企業が大卒者に特に期待する資質」の4位「学び続ける力」、7位「忍耐力」に近い点も興味深い。アルバイト、インターンシップや就職活動を経験してきたことが、この変化に影響しているのではないだろうか。

## 2. 学生の成長を促すこと

各変数について1年次と卒業時に差があるかどうかを調べるために対応のある $t$ 検定を行った結果、人格特性のすべての変数と仕事志向の平均値が有意に上昇していた(Table 3)。得点の上昇から大学生活を通じて成長があったといえる。また、仕事志向の得点上位層の学生が、大学時代に頑張った活動を調べたところ、「学業」「語学研修」「ボランティア」「アルバイト」「インターンシップ」「就職活動」であった(Table 4)。学業にしっかり取り組んだ学生は、職業選択においても自らの関心

や興味を深く考えようとし（渡辺，2018），ボランティア活動によって自他の理解能力が上がり，将来の展望につながった（黒沢・日高・張替・田島，2008）。アルバイトで将来の職業生活に向けた人脈を形成して積極的に活用することや助言の獲得機会を得て（関口，2010），インターンシップに参加することで，自分の将来・キャリアがより明確になり（初見・坂爪・梅崎，2021），就職活動は，自己を理解し仕事社会に目を向け，それらを結びつけて考える契機になった（安達，2004）と考えられる。

さらに大学生活を通じて自分自身の成長を促したものを学生がどのように捉えているかを明らかにするために，共起ネットワーク分析を行った（Figure 5）。上で述べた「ボランティア」「アルバイト」「インターンシップ」「就職活動」と概念に近い「学業」「大学における学び」と「仕事の経験」に加えて，「他者との相互理解」「社会とのつながり」が成長を促すことが明らかとなった。友人，教職員とのつながりが多い学生ほど，大学生活を通して自分自身が成長したという実感を持っている（谷田川，2016）という先行研究とも一致している。そして，親，兄弟，親戚など身近にいる人以外の社会人と「何のために働くか」についての対話によってポジティブな職業観が形成される（宮入，2013）ように，社会とつながりを持つことによって，自分自身についてより深く考えるようになったことがうかがえる。

また，「困難な出来事」も学生の成長をもたらしていることが明らかになった。野崎（2012）は，ストレスが大きかった経験に対して，楽観的思考，気ばらし行動，問題対処という自己領域のレジリエンスを活かして取り組んだ人は，その経験を通じて，自己への信頼という成長を得ると報告している。そし

て，困難な出来事に対しても，卒業時のパス解析（Figure 3）で，仕事志向と家庭志向の両方に影響を与えていた「持続性」を持って取り組むことによって成長を実感できた考えられる。

### 3. 心の健康と自己効力感

中核的人格特性である「心の健康」と「自己効力感」はキャリア意識に影響していることが明らかになった。時代が変化し先が予測しにくい世の中だからこそ，自分らしく生き抜くために心の健康と自己効力感を保つことは大切である。本研究では，家族の関係性が良いと心の健康と自己効力感が高くなることが明らかになったが，家族の在り方を子供である学生自身がコントロールするのは難しいかもしれない。そこで，大学生活において心の健康と自己効力感を高め，維持していくには何が必要かを明らかにすることを今後の課題としたい。

就職後も学生たちが望むキャリアを実現させながらキャリア形成が出来るように，新たな学術的な知見を反映したキャリア教育プログラムを構築する必要がある。今後も時代に合った課題を見出すために，継続的・定期的に研究を行っていきたい。

### 引用文献

- 安達智子（2004）大学生のキャリア選択—その心理的背景と支援— 日本労働研究雑誌，533，27-37
- 藤本哲史（2011）仕事と私的生活のポジティブな関係性 日本労働研究雑誌，606，117-118.
- Greenhaus, J. H., & Powell, G. N. (2006) When work and family are allies: A theory of work-family enrichment, *Academy of Management Review*, 31 (1), 72-92.
- 初見康行・坂爪洋美・梅崎修（2021）多様なイン

- ターンシップ経験と効果の一考察 日本労働研究雑誌, 733, 41-57.
- 樋口耕一 (2004) テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合— 理論と方法, 19, 101-115.
- 岩井貴美 (2021) 大学1年生のキャリア意識についての一考察—近畿大学を事例として— 商経学叢, 67(3), 231-242
- 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル— 川島書店
- 黒沢幸子・日高潤子・張替裕子・田島佐登史 (2008) 学校教育支援ボランティアを体験した学生の変化・成長—その様相とキャリア教育の視点からの考察— 目白大学心理学研究, 4, 11-23
- 宮入小夜子 (2013) 社会人との対話が学生の職業観・勤労観の形成に与える影響—キャリア教育に関する準実験による実践的研究— 日本橋学館大学紀要, 12, 17-31.
- 内閣府男女共同参画局 (2017) 男女共同参画白書 平成29年版
- 内閣府男女共同参画局 (2022) 男女共同参画白書 令和4年版
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤真一・長田由紀子 (1995) 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る— 教育心理学研究, 43, 306-314
- 日本経済団体連合会 (2022) 採用と大学改革への期待に関するアンケート結果 <[https://www.keidanren.or.jp/policy/2022/004\\_kekka.pdf](https://www.keidanren.or.jp/policy/2022/004_kekka.pdf)> (2022年11月14日閲覧)
- 野崎優樹 (2012) 自己領域と他者領域の区分に基づいたレジリエンス及びストレス経験からの成長と情動知能の関連 パーソナリティ研究, 20(3), 179-192
- 大風薫 (2019) 2018年度(平成30年度) 学生生活とキャリアに関する調査—キャリア教育とキャリア意識・学生生活との関連を中心に— 高等教育と学生支援 10, 79-87
- 関口倫紀 (2010) 大学生のアルバイト経験とキャリア形成 日本労働研究雑誌, 602, 67-85
- 鈴木淳子 (1994) 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65(1), 34-41.
- 谷田川ルミ (2016) 大学における“つながり”の重要性 第3回 大学生の学習・生活実態調査報告書 ベネッセ教育総合研究所, 41-48.
- 植田 智・吉森 護・有倉巳幸 (1992) ハッピーネスに関する心理学的研究-2-ハッピーネス尺度作成の試み 広島大学教育学部紀要41, 35-40.
- 渡辺研次 (2018) 基礎的なコンピテンシー, 学習自己効力感, キャリア選択自己効力感が学業の粘り強さ, 学業成績に与える影響 大阪経大論集, 69(2), 389-405
- 柳井 晴夫・柏木 繁男・国生 理枝子 (1987) 新性格検査における併存的妥当性の検証 プロマックス回転法による新性格検査の作成について (I) 心理学研究, 58, 158-165.